

きぎめがなかった。

にくめない人柄で、なかまたちからも好かれていた。

「酒さえ飲まなけりや」

と姐ごは、竹やんに嫁さんの世話でもしたいようなことをいつていた。しかし竹やんは嫁さんより酒の方が好きらしかった。

仕事もよくする方で、振リ方ではだれもかなうものがないかった。人が一立米ほるときに竹やんは二立米ほった。

小間わりのときは、自分の持場を早くすまして、なかまのぶんを手つづった。それでい

て晩じまんは決してしなかった。だからなかまたちはみな、竹やんといふよに仕事をしたがつた。トビ仕事はだめだつ

ヒロシの飯場なかまの竹やんが死んだ。酔っぼらつて階段からころげおちて、それきりだった。テレビを見ていた姐ごが、物音におどろいて飛び出したときは、もうホトケになつていた。

そんな死に方をするくらいだから、竹やんは酒好きだった。毎晩あひるほど飲んだ。

「ほどほどにしとけや。明日の仕事にさしつかえるぞ」

と言われても、

「もう一本だけ、姐さんたのもわ」

片手でおがむ真似して、あとをせがんだ。

姐ごが酒を出さないと、外人出て立ち飲み屋で飲んだ。

根っからの酒好きだから、少々の叱言など

だが、工方仕事は何をさせてもうまかった。

親方も竹やんを信頼していて、

「酒さえ飲まなけりや」

現場の一つぐらいまかせたいと、いつも言っていた。

そんな竹やんに、

「もう一本だけ」

とせがまれると、さすがの姐ごも三度に二

度は負けてしまい、しぶしぶ顔で、

「明日休んだら、しょうちんぞ」

などと言いながら、もう一本出した。すると竹やんは、そのときだけマジメな顔になつて、

「行くとも、はつてでも仕事には行くわ」と言うのがつねだった。

竹やんのもう一本はきりがなくて、もう一本を飲んでしまうと、姐さんもう一本だけビビ手を出すから、もう一本は、もう五本かもう十本になつてしまう。

姐ごは竹やんの「もう一本」がはじまると

さつさと部屋に引つこんでしまう。いくら呼んでも返事がないから、やつと竹やんはもう一本をあきらめる。

その竹やんが階段から落ちて死んだ。

うたるような暑い日がつづいて、さすがの竹やんもバテ気味だった。

七月の中ごろ梅雨があがつて、もうすぐ甲子園で高校野球がはじまるというのに、一滴も雨の降らぬ日がつづいている。毎日三十五度をこす暑さなのだ。

「土方殺すにや、刃物はいらぬ。雨の三日もふればよい」

というけれど、日ざりつづきもエ方のいのちを切りきざむ。

梅雨のあいだに工事がおくれた分をとりかえそうとして、またいつ降り出すかわからぬ雨にぞなえて、元請が工事を急ぐからだ。

土方たち、天気がフスク間は休みなしに働かねばならない。

ヘルメットが腰に焼けて、脳ミソが煮えに

ぎるようだ。汗があきひもをつたって、ぼたぼた落ちる。目に入ってしみる。シヤツだつてじゅくじゅくだ。

現属へ出たらヘルメットをかぶれなんて、だれが考えたんだ。そいつはおおかた土方をしたことのないやつだろう。あんなものかぶって、真夏の炎天の下でツルハシもつてみる。しまいに気が狂うぜ。

わるいことに、早出や残業がフツいた。日中の暑さで仕事はかたからないから、その分をどこかえすためだ。

「何せ暑いからのう。朝夕のすずしいうちに仕事するのをおかたがいのためや」

と親方はいうけれど、その言葉を信じて昼間ちんたらやっていたら、ときめん早出と残業がふえるしかけになっている。どつちにころんでも土方はらくな仕事じゃない。

ヒロシたち土方は、早出と残業がきらいだ。それはどこの会社のサラリーマンも、どこの工場の工員もおなじだろうが、土方はちま

をかくやつなのだ。

規則や時間にしばられるのがきらいだからこの渡世をしているんだ。気に入らない飯場はさつさとトンスラする、気に入った飯場でも気分がかわれば、その場でサヨナラだ。

履歴書もいらねえ、身分証明もいらねえ。

行きあたりはったり飛びこんだ飯場がねぐらのだ。仕事の腕をじまんすることほあつても、めんどろな責任はごめんこうむる。

たから才したちのことを自由労働者というのだと、いつかだれかが教えてくれた。でもヒロシは、そいつは自由失業者のまちがいじゃないかとおもっている。

とにかく、ヒロシたちは早出や残業は大きらいだ。そのかわり小間割りはすきだ。ほりほり働いて一日の仕事を早くすませて、さつさと帰ってくる。こんな気持のいいことはありやしない。

親方は朝夕の涼しいうちにというけれど、ヒロシたちは早く帰りたいから、日中もかん



はつてはせらく。腦ミソの煮えくりかえつてどたまには水をかぶって。

しかし、親方とか元請とかの奴なんてものはすさまじいものだ。せつかく日中がなはつてやったのに、よくやったとは言ってくれても、早く帰れとは言ってくれない。やれ残業だ、やれ早出だと追いまくりやぶる。

さすがの竹やんも夏バテだった。バテたのは竹やんだけじゃないが、他のものは、ときとうに休むのに、意地っはりだから竹やんは一日も休まなかつた。

「休ませてくれ」

と、ほともに親方にたのんでも、なかなかうんと言つてはくれないが、そんなときには夜中にさつと飯場をぬけ出して、今は夏だから公園とかで音刀ンして、朝の九時ごろみんなが仕事に出たあと、こっそりもどればいいんだ。親方もそこまで文句はいわない。

でも、竹やんはそれをやらなかつた。くそあついのに一日もやすまず現場に出て、人の

倍もはたらいて、早出も残業もちゃんとき
あって、帰ればきまって酒だった。バテるの
があたりまえだ。

いや、竹やんがバテたのは、この夏の暑さ
のせいばかりではない。無理がたたって、ず
っと前から体をこわしていたのだ。それがこ
こへきて、とっと疲れたのにちがいない。

めずらしく竹やんが仕事を休ませてくれと
言った。

「何を言いよるねん、今日はお前が出んど
掘りかたの仕事が終らんやんけ」

と親方は小さい目を三角にして言ったが、
竹やんの目が赤くトロンとして、酒くさい息
をしているのを見て、何も言わなくなった。
竹やんの酒が朝までのこつているのはめず
らしいことではないが、この朝はいつもとち
がっていた。体が左右に、ゆらーり、ゆらー
りゆれて、とても現場へ出られるぐあいでは
なかった。

「だからアレほど飲むな言うたのに」

「XXX組のおやじさーん。おたくから電話
でっせえ」

とどなった。

ヒロシとなかまのもう一人が、腰あしを
いれているのを、上からさしずしていた親方
はすぐ事務所へ行つた。うるさいやつがいな
くなって、ヒロシたちはほっとした。

それが、竹やんの死を知らせる電話だった
のだ。

その日の残業は中止になった。

「クッ悪い死に方しよつて。竹のやつどう
せ死ぬなら現場で死ねば、親孝行するほどせ
二がとれたのに。なア」

と親方がだれにともなく言った。ヒロシは
じまつていたが、竹やんと飲み友だちの一人
が言った。

「現場で足場から落ちたことにしてやった
らどないです？」

「基準局がやかましいさかいなア。だから
酒は飲むなといつも言うてったんや」

と姐御が言った。

前の夜、いつものように、もう一本がもう
五本ぐらいになり、いつものように姐御がお
こつた。

「いつまで飲んでるんや。ウチは赤ちやう
ちんの飲み屋とちがうんやで。竹やん一人の
かけで、いっつも片つかへんやないの」

竹やんはそのとき、かなしそうな表情でト
ロンとした目をむけて

「仕事なら行くよ。うん、たどえはつてで
も行くよ。なア姐さん、もう一本だけ」
と言った。

それからもう一本だけもらつたか、外へ出
て飲みなおしたかしらない。なぜならオレは
そのとき風呂に行き、かえるとすぐ寝てしま
つたからだ。

あいもかわらず、うんざりするような暑い
日だった。

昼休みのすこし前、現場事務所の窓から体
をのり出して、若い監督が、

親方は舌打ちした。

ヒロシは前の夜の竹やんが、もう一本だけ
といつたときの悲しげな顔をおもいだし、そ
れにかさねて土曜の夜のことをおもいだした。
あのときオールナイトの映画を見るつもり
で、ヒロシは町に出た。映画館で踊まです
さして翌日の仕事を休むつもりだった。

まだ時間が早かつたので、ヒロシは町をぶ
らついた。ヤチンコで二百円換けて、本屋で
週刊誌を立ち読みして、まだ時間があつたか
ら、サテンに入ろうとしたとき、竹やんに声
をかけられた。

「ヒロシ、一杯つきあえよ。アイスクリー
ムなんかなめてちゃ、一人前の土方にはなら
れんぞ」

ヒロシはあまり酒は好きじゃない。でもサ
テンにはいろいろとしたのは、アイスクリーム
のためじゃない。その店はウエスタンのレコ
ードが多いからだ。レコードききなならコー
ヒーをのんだと目なさえてくる。

「エ方のくせにへんなやつやな。あんな音楽のどこがええんや」

と竹やんはヒロシを飲み屋にひっぱつていった。そこにもジュークボックスがあつて、並々人懐どか、人生劇場などの演歌があつた。

「歌は聴きよな将棋のコマに、かけたいのちを笑わば笑え」

と竹やんはレコードにあわせて玉将をうたつた。本人は気もちよさそうだが、からから声で、調子はずれにどなるので、はためいわくな歌だつた。

オールナイトに行くのは映画をみるためではなくて、映画館で眠るためだから、コーヒーのんで目なせるより、酒を飲んでねむくなくたほうだ、理くつにあつてゐるかもしれないとヒロシは思つた。

「エ方するなら土方の根性もたなあかんど」
と竹やんが、いつもとちがつてお説教じみたことを言つたのはめずらしかった。以前に

あわせて番号をしらべて電話をかけた。竹やんの兄という男は、

「弟とは十年も前から何の関係もない、あんが男が死のうと生きようと、しつたことではない」

と言つたそうだが。それでもせめて遺骨の引取りにきてほしいといつたら、

「ア方の他人同様の男の骨なんか、もらつても置腹にこまる。そちらで焼くなり、するなりおきなようにしてくれ」

と、めいわくそうに言つて電話がぎれたそうだった。

「十年前にどんなことがあつたかしらないけれど、つた一人の肉親の言いぐさにしてはつめたすぎるやないか。よし、それならこつちで盛大な葬式を出してやる」

と親方がいきまいた。

その次の日、親方の言葉どおり、竹やんの葬式が飯場でおこなわれた。しかし、半分以上のなかまは仕事にいかされたし、そんなに

くらばると、だいたい半減に弱くなつたは、と思つた。

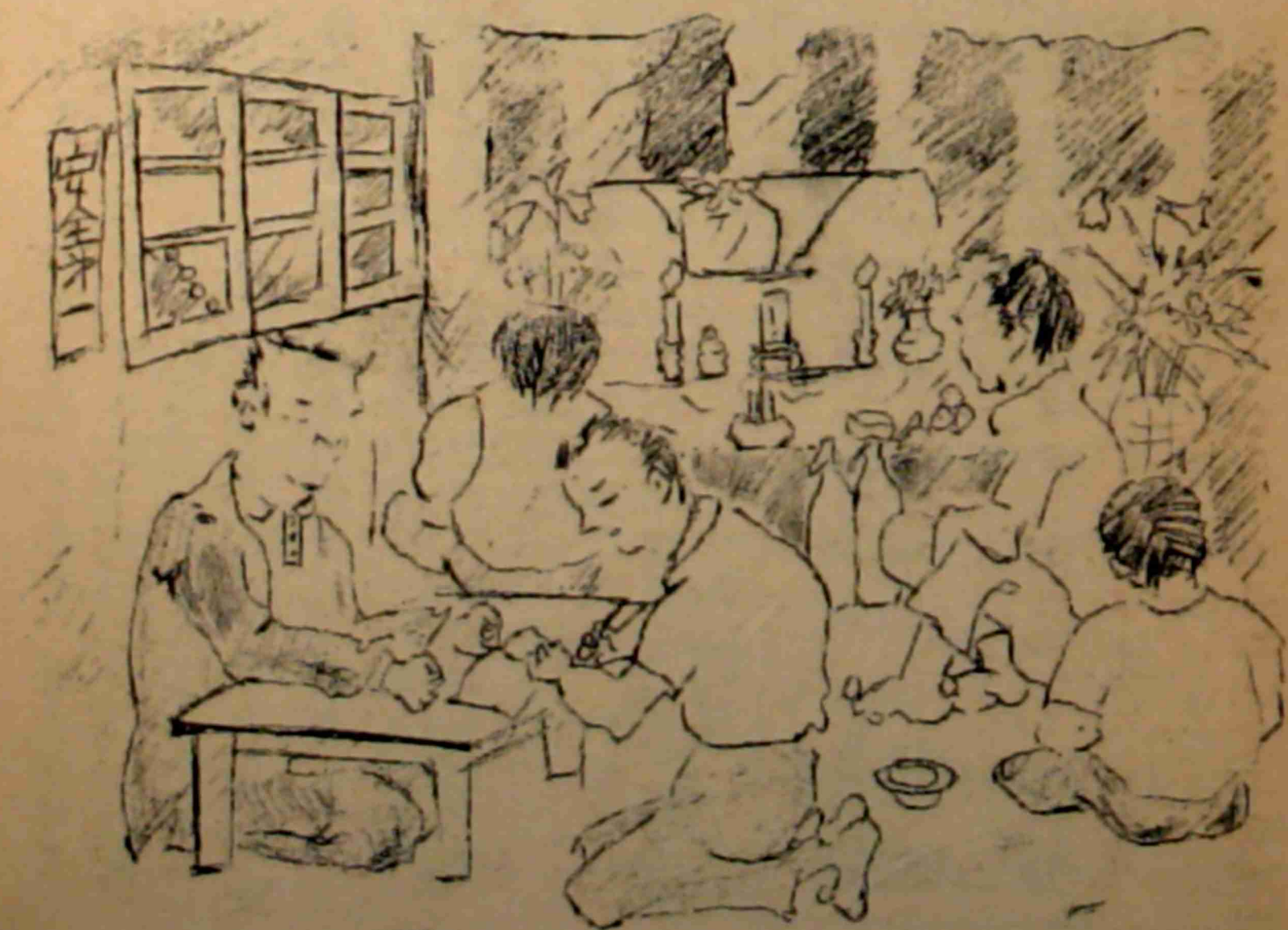
「しかしなアヒロシよ。何ぼ土方の根性いうても限度ちうもんがあるでえ。うちの親方は仕事の愚や。オレは酒で元気づけて現場に出とるが、いまに仕事に殺されるで」

翌日、ヒロシはまんまと休んじが、竹やんはやはり仕事に出た。死ぬ日まで一日も休まなかつた。

あれが土方の根性だろうか。そんなのは馬鹿らしいぜとヒロシは思つた。しかし、竹やんの本音は「いまに仕事に殺されるで」のほうだつたにちがいないと思つた。

酔つぱらつて階段から落ちたのだから死因は酒のせいだが、その酒は仕事のためだから仕事は竹やんを殺したとも言えるのだ。

親方は竹やんの本籍地に電報を打つたが、次の日の夕方になつても何の返事もなかつた。帳づけのおつさんが、電話局に何度も問い



盛大とはいえなかつた。

仕事に出るなかまたちは、竹やんの棺に之
よならをいって出ていった。

ヒロシは親方に残れといわれて、仕事には
いかなかつた。親方の背広を着せられて、黒
い腕章をつけ、受付にすわることになった。

香典はかなりあつまつた。親方の顔で、あ
ちこちらの元請や、親方連中がとどけてくれた
し、近所の人も来てくれた。

「でも、竹やんの兄キが遺骨を引きとらな
いとしたら、この香典はどうなるんやろう」
とヒロシが聞くと、いっしよに受付になら
んだ帳アけのおつさんが、

「この葬式の費用だつて莫大だからな」
とあたり前のような顔でこたえた。つまり
香典は親方のふどころにみんな入つてしま
うのだ。しかも、葬式の費用は健康保険から
出るはずなのだ。

何だ馬鹿らしい。親方は正義の味方みたい
なことを言いながら、葬式でまでピンはねし

てやる。

そう思つたら腹が立つてきた。盛大な葬式
でなんて、くそくらえだ。もつともらしい顔
でお金をよんでいる坊さんの顔まで、ウソの
かたまりのような気がしてきた。

座アけのおつさんが小便にいつたあとで、
ヒロシは香典を四、五枚ポケットに入れた。
葬式が終つてから、ヒロシは町に出た。香
典ぶくろの中は、全部で三万円あつた。

「死んだ者がいちばん損だな、竹やん」
今月の勘定はもらつたばかりだし、このま
まケツワツてもいいつもりである。

——世渡者労働

8月愛読者のフとい

一まア 毎月ボチボチ
やっていにかという
ことで今月もやりま
す。投稿なんかも持
って来てネ!!

20日(水) 晩6じ半
西城市民館3階講堂